

## 神経内科学分野 (旧神経内科学講座)

北大に神経内科が正式に診療科として独立したのは一九八七(昭和六二)年五月、そして、医学部講座に昇格したのは一九九五(平成七)年である。北大神経内科は二〇〇七(平成一九)年に創設二〇周年を迎えた。

歴史的にみると、北大の広義での「神経学の源流」は、諏訪望北大精神医学講座教授まで遡ることとなる。諏訪教授は「近代神経科学の創始者」とされる米国ハーバード大学スタンレイ・コブ教授のもとに留学している。その諏訪教授のもとで助教を務めていた都留美都雄教授が、脳神経外科を開設し、そして、神経内科はこの脳神経外科を母体として誕生した。他大学の神経内科のほとんどが内科から分離独立したのと比較して、北大の「臨床神経学」は、精神科から脳神経外科、そして神経内科へと、関連領域を母体として発展してきたものであり、欧米と同じ土壌を共有していると言える。

北大医学部に脳神経外科が独立したのは一九六五(昭和四〇)年四月で、この一九六四(昭和三九)年から一九六五(昭和四〇)年にかけては九州大学、次いで東京大学、新潟大学に神経内科が独立した時期にあたる。当時は、欧米に倣い、臨床神経学を担う専門分野を神経内科として独立させる動きが盛んになってきた時期である。脳神経外科を創設された都留教授は米国に五年半にわたり留学、日本人で初めて米国脳神経外科専門医の資格を取得したばかりでなく、そのうちの一年間をボストン市立病院神経内科デニー・ブラウン教授、ジョセフ・フォーレイ准教授のもとで神経学、神経病理学を修めた。この経歴からもうかがわれるように、脳神経外科学のみならず、神経学全体に造

詣が深く、その評価の例としては、日本神経学会において理事や学術総会会長を歴任したことを挙げれば足りるであろう。

北大神経内科の独立は、一門の努力はもとより、医学部や病院の教職員の支持と応援によるものであった。さらに特筆すべきこととして、神経内科は脳神経外科学講座の中で育まれて、その庇護のもと発展してきた。全国的にみても、脳神経外科から分家独立した神経内科は、北大が唯一であり、他大学の神経内科設立の経緯と比較して、特異な経過を辿っている。

### 田代邦雄教授時代(一九八七～二〇〇三)

神経内科の初代教授は田代邦雄現名誉教授である。

田代教授は一九六四(昭和三九)年に北大医学部を卒業後、横須賀米国海軍病院で一年間のインターンを修めて、神経内科を目指すべく母校北大医学部に一九六五(昭和四〇)年四月に独立したばかりの脳神経外科に入学した。都留教授の助言に従って二年間の臨床研修の後に、米国クリブランド市のウエスタンリザーブ大学(現ケース・ウエスタンリザーブ大学)神経内科ジョセフ・フォーレイ教授のもとに一九六七(昭和四二)年七月に留学した。ここで、神経内科レジデント三年間、ついでセントルイス市のセントルイス大学神経病理ジェイムス・ネルソン准教授のもとで、神経内科の基本である神経病理レジデントを二年間、計五年間の在米生活の後に一九七二(昭和四七)年八月に帰国した。翌年の一九七三(昭和四八)年二月に脳神経外科講師となり、神経内科診療班を結成して神経内科疾患の診療を開始、脳神経外科の講義枠の中で、神経学の学生講義を担当した。蛇足ではあるが、当時の画像診断はX線CTの開発のめどがたった程度であったので、論理的な局在診断と、今は廃止されたが患者を交えての臨床講義で実演した流麗な診察テクニクが学生を大いに魅了したようである。

脳神経外科の医局において「神経内科診療班」は一室を神経内科専用の研究区画とし、その「四研(脳神経外科第四研究室)」と言えば神経内科の拠点、そし

て筋組織化学診断部門の代名詞となった。神経内科診療班としての外来診療は脳神経外科が手術日で外来診療をしない水曜日と金曜日を外来日とした。この年に、後に初代同門会会長を務めた濱田毅が助手(脳神経外科より借用)に採用され神経内科配属となった。

神経内科診療班は脳神経外科から講師(田代)と助手(濱田)の二つの有給ポストを提供されることにより、その活動の基盤を保障されたと言える。これを契機に、北大内外から神経内科を学ぶ仲間が次々と集まり始め、濱田助手が退職の後、一九八一(昭和五六)年一〇月より森若文雄助手の発令があり、一九八二(昭和五七)年一〇月には北祐会神経内科病院(濱田毅院長)が開院した。これに一九七三(昭和四八)年四月より神経疾患の診療を開始した国立療養所札幌南病院(松本昭久院長)を加えて神経内科連携施設が二つとなり、神経疾患の外来から、入院、療養まで対応できる体制が整い始めた。一九八二(昭和五七)年一〇月には神経内科専攻の教室員から初めての海外留学として、森若文雄助手がカリフォルニア州ロサンゼルス(UCLA)ニューロマスキュラー・センターに留学した(昭和六〇年三月帰国)。

一九八四(昭和五九)年三月には都留教授が退官したが、同年五月末には都留名誉教授を会長として第二五回日本神経学会総会が札幌にて開催された。神経内科を中心とする日本神経学会総会で脳神経外科の都留美都雄が会長を務めた。会場は教育文化会館および厚生年金会館(現さっぽろ芸術文化の館)、会長講演は「脊髄、脊椎疾患の診断と治療における最近の進歩」と題するものであった。この総会を主催したことは、都留教授の神経学(神経内科学)に対する多大な貢献、そして日本神経学会理事を歴任した実績が評価されたことによるものである。さらに、この総会は北海道における神経内科の発展・啓蒙に多大の影響を与えた総会としても特筆すべき出来事であった。

都留教授の後を継いだ北大脳神経外科二代目阿部弘教授は、その後の神経内科設立のために尽力し、日本神経学会理事を歴任した。一九八四(昭和五九)年一月、田代邦雄が脳神経外科助教授に発令された(写



写真1 助教授発令を祝って参集した関係者一同

真1)。当時、助教授は文部大臣発令であったので、これにより神経内科開設への展望が開けた。一九八七（昭和六二）年五月二二日、医学部附属病院に正式な診療科として神経内科が開設された。それに至るまでに、脳神経外科・神経内科診療班としてスタートしてから一四年の月日が経っていた。一九八七（昭和六二）年七月一六日付けで、田代邦雄が神経内科初代教授に発令され、同年八月二六日、神経内科創設および教授就任を祝う会が、ホテルニューオータニ札幌で開催された。（写真2）

神経内科病棟は脳神経外科病棟内の一二床を稼働し、神経内科外来は同年九月一日に独立した。診療科の開設にともない、新たに医局を旧医学部附属病院南病棟三階の西端にある形成外科医局跡に開設した。北大神経内科は道内の三医大で最初に正式に独立した神経内科であり、その開設と同時に、道内各地から



写真2 診療科開設と教授就任を祝って参集した関係者一同

患者が殺到した。外来は夕方になっても終わらない日々が続いた。道民と医療関係者からの期待の大きさを物語る一例である。診療科としての独立の喜びは、「北海道大学神経内科―開設までの歩み」（一九八八年三月刊行）、「北大脳神経外科同門会誌 第四号 神経内科創設・田代教授就任記念特集号」（一九八八年七月刊行）に詳しく掲載されている。一九八九（平成元）



写真3 講座開設当時の関係者一同

年一〇月には、森若脳神経外科助手が神経内科助教授に昇任した。

以上は神経内科設立の経緯であり、やや詳しく述べた。その後、一九九四（平成六）年に附属病院新棟完成にともない、神経内科は二〇床に増床され、専門の看護体制も敷かれた。一九九五（平成七）年四月に医学部神経内科学講座に昇格し、助手一名の定員増により、菊地誠志助手の採用があった。一九九五（平成七）年四月七日には北大医学部神経内科同門会設立総会が開催されて、北祐会神経内科病院濱田毅院長が初代会長に就任した。同年、四月二二日にはセンチュリーロイヤルホテルにおいて、神経内科学講座開設記念祝賀会が開催された（写真3）。祝賀会の模様と一

同の喜びは、「北海道大学神経内科の歩み―その誕生から診療科、講座そして大学院研究科まで」(一九九九年二月刊行)に詳しい。  
一九九六(平成八)年四月、定員増があり、佐々木秀直講師の採用、これで神経内科の医学部付き有給ポストは四(教授一、助教授一、講師一、助手一)となった。一九九八(平成一〇)年に大学院化に伴い大



写真4 第43回日本神経学会総会での記念写真



写真5 第18回日本神経治療学会総会での記念写真

学院医学研究科神経病態学講座神経内科学分野と名称を変更。一九九八(平成一〇)年六月、附属病院管理棟の改修に伴い、医局は旧南病棟から管理棟二階に移転した。これにより、初めて研究室も本格的に整備され、診療のみならず教育や研究の基盤を得たと言える。その成果は教室で主催した学会活動に反映されている。代表的なものとしては、一九九九(平成一一)年二月には第一回日本神経免疫学会学術集会(東京、二〇〇〇(平成一二)年三月には第三五回脳のシンポジウム(北大学術交流会館)、同年六月には第一八回日本神経治療学会総会(北大学術交流会館、写真4)、二〇〇二(平成一四)年五月には第四三回日本神経学会総会(ロイトン札幌)の主催などが挙げられる(写真5)。会長講演である「時、場所、人と神経学」は、それまでの北大神経内科の経緯と発展を全国に紹介する内容であった。北大からは神経内科のみならず、脳神経外科、放射線科のスタッフが教育講演やシンポジウムの講師として活躍した。  
このように教室は順調に発展してきたのであるが、二〇〇二(平成一四)年一月には長らく教室運営の中心的役割を担ってこられた森若助教授が札幌南病院へ転出し、佐々木講師が助教授へ、菊地助手が講師へ昇任し、新たに緒方昭彦助手の採用となった。二〇〇三(平成一五)年三月には田代教授の最終講義があり、退官記念祝賀会が三月二日に札幌ニューオータニにおいて盛大に開催された(写真6)。退官後、田代教授は北大名誉教授としての称号を付与され、北海道医療大学教授として赴任した。また、同年四月一日より菊地講師が助教授に昇任した。

### 佐々木秀直教授時代(二〇〇三)

二〇〇三(平成一五)年七月一六日、二代目として佐々木秀直教授が発令され、教室の運営を引き継ぐことになった。八月二日、京王プラザホテルにて就任祝賀会が開催された。同年一〇月一日、緒方助手の講師への昇任、矢部一郎助手の新規採用があった。二〇〇四(平成一六)年二月二四日、労働科学研究「こころ



写真6 田代教授退官記念祝賀会に列席した関係者及び来賓

の健康科学研究発表会」を医学部臨床大講堂で開催した(世話人田代邦雄)。二〇〇五(平成一七)年一月一日緒方講師の退職に伴い、矢部助手が講師に昇任し、新たに辻幸子(現秋本)が助手に採用された。この間、大学教員の五パーセント定数削減計画に伴い、神経内科の医学研究科付き有給ポストは他の診療科と同じく三ポスト(教授一、助教授一、助手一)となり、病院に神経内科付き助教ポスト一が調整により配置されることになった。二〇〇六(平成一八)年九月に菊地助教授が国立病院機構札幌南病院に転出したこ



写真7 神経内科創設20周年記念祝賀会

とにともない、この配置が確定した。同年、カナダのマックギル大学医学部に留学していた新野正明が帰国し、一〇月一日より助手に採用された。同二〇〇六（平成一八）年一月一日、矢部講師は助教教授に昇任した。このころ、大学教員の名称変更があり、助教教授は准教授、助手は助教と称されることになった。二〇〇七（平成一九）年九月二三日には、ヒルトン小樽にて、教室と同門会の共催により「神経内科創設二〇周年記念祝賀会」が開催された（写真7）。田代名誉教授からは「北大神経内科は如何にして誕生したか」、

来賓として参加頂いた日本神経学会の葛原茂樹理事長からは「私とNeurology」と題して、記念講演を頂いた。

二〇〇九（平成二一）年四月に医局は病院管理棟二階から医学研究科中研究棟一階東側に移転した。神経内科も二〇〇三（平成一五）年よりの大学の独立行政法人化、卒後臨床研修の義務化、名義貸し問題など、幾つかの荒波に翻弄された。そのような環境ではあるが、教室員には新人が加わっている。神経内科学教室の扉には、以前と同じく、講座昇格を記念して作成した、当時の金色に輝く表札が今も掲げられている（写真8）。田代名誉教授は北海道医療大学教授を退職された後は、北祐会神経内科病院顧問として診療と若手の教育に尽くした。森若前助教教授は北海道医療大学教授としてコメディカルの教育と大学運営に携わる傍ら、二代目同門会長に就任した。菊地前助教教授は札幌市内の二つの国立病院（札幌南病院と西札幌病院）が統合されて新たに発足した北海道医療センターの副院長として、機構整備に活躍している。ともに、教室の運営に側面から支援している。

以上が、学内からみた神経内科の創設前夜から現在までのあらましである。北大医学部脳神経外科のなかに神経内科が活動を開始したのが一九七三（昭和四八）年とすれば、二〇〇九（平成二二）年は数えて三七年目に当たる。その間、教室とその出身者は北海道庁や北海道難病連が主催する医療相談や難病検査業務の大部分を担ってきたといっても過言ではない。そして、神経疾患を診療するために道内医療機関に神経内科を開設してきた。幾多の施設の中で現在も機能している施設を列挙してみると、教室出身者が一九七三（昭和四八）年四月には国立療養所札幌南病院にて神経疾患の診療を開始、一九八二（昭和五七）年一月には北祐会神経内科病院が開院した。その後は、一九八三（昭和五八）年四月に釧路労災病院、一九八九（平成元）年五月には市立函館病院、一九九二（平成四）年七月には市立札幌病院、同年一月には伊達赤十字病院、一九九五（平成七）年四月には苫小牧市立病院、一九九六（平成八）年四月には帯広厚生病院、

一九九九（平成一一）年四月には旭川赤十字病院の順で神経内科が開設された。この他に美唄労災病院や国立函館病院へも一時、教室から赴任したが、その後の医療環境の変化や施設の運営方針の変遷などにより、退職者の補充を断念した。また、北見赤十字病院や稚内市立病院には非常勤で定期的な診療応援を行っていた。このように、当教室では地域の基幹病院に神経内科を開設してきたが、いずれも地域においては神経疾患医療の中核を担い、卒後教育病院として北大病院と連携しながら後継者教育の一翼も担って機能し続けている。

ここで専門医の育成について触れておきたい。日本神経学会では神経内科専門医の認定を行っている。一九七三（昭和四八）年より北大で神経内科診療の開始以来、ほぼ毎年にもわたり新規に入局者が加わってきた。北大病院で始まった二年間の内科初期研修以後は



写真8 神経内科の表札

卒業三年目の入局となっている。表に示した数字は、後期研修医（卒業三年目以降）の神経内科研修生の推移である（図1）。初期研修医はこの中には含まれていない。二〇〇九（平成二一）年八月現在までに累計で一二四名が北大神経内科で学んだ。そのなかには内科、脳神経外科、整形外科からの研修生が若干名含まれている。残りは神経内科を専攻し、そのほとんどが専門医資格を修得して道内外で教育、診療、研究の最前線で活躍している。

最後に神経内科の研究について触れておきたい。神経内科の診療とする疾患は脳・脊髄、末梢神経、骨格筋を中心とする機能的・器質的疾患である。この中には発達から老化まで、多彩な疾患が含まれている。その中から北大神経内科では、北国に多い多発性硬化症、難治性神経疾患としては筋萎縮性側索硬化症、パーキンソン病、脊髄小脳変性症の四疾患に重点的に取り組み、臨床のみならず様々な基礎的研究技法を取り入れて、内外にその成果を発信してきた。この領域では、日本における指導的研究者もしくは臨床医が教室から育って、活躍している。田代邦雄教授は、厚生省特定疾患神経変性疾患調査研究班の班長を二期六年、務めた。筋・末梢神経疾患に関しては、四研時代から継続して生検組織の免疫組織化学診断を行い、道内の筋疾患診療を支えてきた。最近では、IT環境の整備により関連病院と定期的にNetカンファレンスを行うことにより、関連病院における筋疾患の診療水準の維持と卒業教育に努めている。

神経内科の黎明期と設立の経緯、その後の発展の詳細については、教室の業績集や同門会関係の冊子を参考にした。また不明な点は、田代名誉教授と森若同門会会長（前助教授）が補筆した。

神経内科の現在の活動状況については、神経内科ホームページに掲載しているので、併せてご参照頂ければ幸いである。

参考文献

北海道大学医学部脳神経外科 神経内科部門のあゆみ、脳神経外科神経内科部門 一九八八年一〇月刊行。

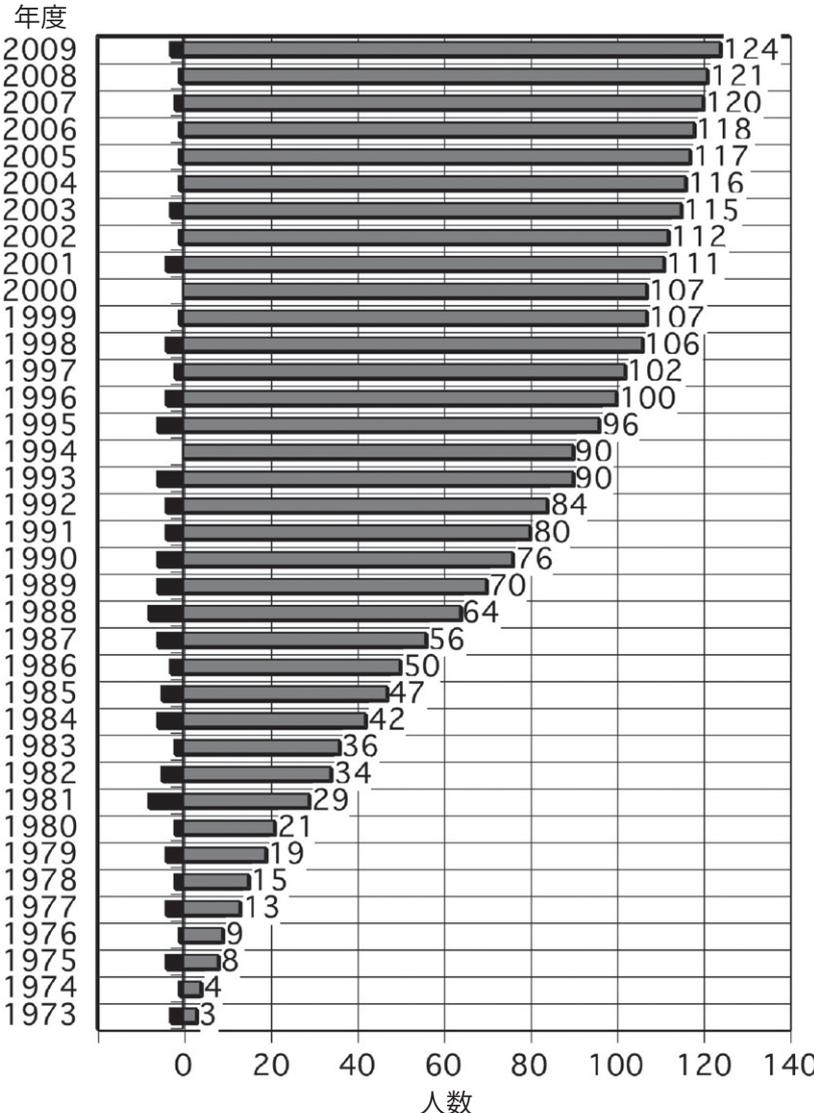


図1 神経内科の研修者数 (■ 累計 ■ 入局者/後期研修医)

北海道大学神経内科 開設までの歩み 一九七三―一九八三、医学部附属病院神経内科 一九八八年三月刊行。  
 北大脳神経外科 同門会会誌 第4号、北大脳神経外科同門会 一九八八年七月刊行。  
 北海道大学医学部附属病院 神経内科 開設五周年記念誌、医学部附属病院神経内科一九九三年五月刊行。  
 北海道大学神経内科のあゆみ―その誕生から診療科、講座そして大学院研究科まで、神経内科学分野 一九九九年一二月刊行。  
 田代邦雄教授 退官記念業績集 一九七三―二〇〇二、神経内科学分野 二〇〇三年三月刊行。

(佐々木 秀直)

(この文章は北大医学部九十年史に掲載されたものです。)